

〔千載和歌集〕堀川院の御時、百首の歌奉りけると、春雨の心をよめる、

前中納言匡房

よも山に木のめ春雨降ぬればかぞいろはとや花のたのみむ

〔古事記傳 二十一〕常根津日子伊呂泥命略伊呂泥は伊呂勢略と同くて、同母兄の意か、書紀に、此

御名を某兄イロチと作れ、神代卷、神武卷、欽明卷、孝德卷などに、兄をも然訓り、和名抄にも、兄日本紀云、

伊呂禰とあり、同母姉を伊呂泥と云によりて、此泥は凡て女に限れる稱の如く聞ゆれども、

伊呂泥イロチも准ふべし、されば此は、男女に通ふ稱なり、同母姉を云は、阿泥アチの阿アさて伊呂とは、人を

親み愛みて云る言にて、某入彦某入娘と申す御名の伊理又郎子郎女などの伊良も、皆此同言

の活用にて同意なり、日子坐王の御子に伊理泥王、崇神紀に飯入根と云名なども、伊呂泥と云

と通へるを以て知べし、同母兄弟を伊呂勢、伊呂杼、伊呂妹母を伊呂波と云も、伊呂波は伊親み

愛みて云稱ぞかし、方葉イロチ十六に、伊呂イロチは、其人を親みて云るなるべし、さて此伊呂泥を、書紀に某兄と書

れたる某字は、如何なる由にか、若しくは、古へに人を親みて云るよりうつりて、其名を云へべき

禮賀志レガシなど、訓て、名に代て云字なり、書紀には、此下なる蠅伊呂泥

蠅伊呂杼イロチをも、紐某姉、紐某弟と書れ、垂仁紀イロチに、某邊とも書れたり、

〔松屋筆記 三十八〕大方殿御方

太平記伯耆の卷などに、大方殿とあるは、母堂の事なり、親元日記にも、將軍の御母堂をば大方殿

と書たり、また御方といふは、御方御所ともいふ、御方住居の義にて、將軍家の御嫡子の事なり、親

元日記には御方御所とあり、

〔花營三代記〕應永廿九年七月十三日戊寅、御方御所様嗟峨御出アリ、大木庵へ御入御點心アリ、香

嚴院々主、主首座御袋死去御坊門前マデ御出アリ、有御對面、御馬鹿毛御歸御輿也、

〔康富記〕享德四年正月九日乙卯、今曉室町殿姫君誕生也、御袋、大館兵庫頭妹也、

御袋

大方殿